

水島恵一先生のご逝去を悼んで

2015年7月27日、生活科学研究所を設立された水島恵一先生は御逝去されました。

研究所の仕事が一段落したら、軽井沢へ避暑に出掛けられないうちにお見舞いにお訪ねしようと思っていた矢先のことでした。昨年1月には体調を崩されて入院なさっておられましたが、研究所紀要第37集への掲載をお伝えしましたら、大変お喜びになられたと御長女の陽子様から伺っておりました。その頃は声も出にくく筆談でご指示されたとお聞きしました。

先生は1966年より本学に奉職された35年の間、本学家政学部学部長、人間科学部学部長、人間科学研究科長、本学学長を歴任され、とくに人間科学部の創始者としても本学に多大なご貢献をなさいました。また、生活科学研究所は水島先生のご提案により、昭和51年に家政学部の発展的解消を機に生活科学研究部として設立され発足いたしました。研究所設立当初は、元家政学部長であった水島先生の呼掛けで家政学部の先生方や助手と共に、個々の専門分野を活かしながらまとめる方向性を、学問領域の接点を模索されておりました。先生のご発案で個々のテーマを持ち寄ることで、取り敢えず共通の接点を創られました。そして「元荒川流域の生活実態調査」のスタートとなりました。

水島先生は学生指導も大変ご熱心で、研究部ではエコロジーグループの学生達との交流が思い出されます。毎週一回は5、6人の人間科学部の学生達に囲まれて、昼食を共に召し上がっておられました。学生の研究テーマは水質問題や自然食品、添加物問題、テレビコマーシャルについてなど、日常の生活の中の問題で、当時の社会問題となり注視されていたものでした。学生と歓談しながら、一人一人の話しに耳を傾けられていたお姿が思い出されます。葬儀にはその学生の内の何人かが、駆けつけておりました。中には他大学で心理学の教授を務める卒業生もおり、皆同じ頃の水島ゼミの卒業生でした。先生と交流が続いていたのですね。追悼文を書き始めてから様々な思い出が走馬灯のように出てまいります。図式投影法セット試作の思い出：先生がご考案され心理分析に役立っている図式投影法についても、考案段階でお手伝いできたことを光栄に思います。当時病欠で長期休職の後復職した私に、図式投影で使用する感情カードと駒（人）の試作を任されました。投影法の被験者役にもなり試作の効果も試しました。静かな環境をとのご配慮であったと感謝しております。墨絵と第九と讚美歌：先生がご趣味とされていた墨絵はスケールが大きく、何枚にもわたって描かれた松の襖絵は見事なものでした。当時、先生のゼミ学生の記憶にはとくに印象深かったようで、今でも当時の卒業生が集まると思い出としてよく語られています。東日本大震災の津波で生き残った一本の松が描かれた賀状は、先生の慈しみ深い思いが込められているようでした。一昨年、ご自宅へお伺いした際には、ドイツの楽曲から讚美歌まで、ピアノの伴奏もご自分で弾かれて、次々に数曲を歌われました。「すっかり声が細くなっちゃいました」との奥様のお言葉が思い出されます。かつて人間科学部のパーティーでは、お得意の第九やゴンドラの歌などを豪快に披露されておりました。また先生は桜並木が大変好きでした。ご家族か

ら頂いたお写真のメモに恵一観桜会とあるほどで、昨年は車椅子でご覧になっておられたようです。玉川上水の桜並木がことのほかお気に入りのようでしたが、大学前の元荒川堤が桜の時期になると、駅から桜堤を遠回りして大学に来られるのが楽しみのごようでした。

先生が中心となり、スタートさせた紀要「生活科学研究」は第38集となり、入稿数も30編を超え、発刊へと向かっています。12月に毎年度開催される研究報告会も熊本や大阪といった遠くから客員研究員が参加しております。今年度は先生のご友人で、筑波大学名誉教授の臺利夫先生をお迎えしてご報告戴き一層充実したものとなりました。また研究所の研究領域も社会福祉学、心理学諸領域、教育学、社会教育学、経済学、文化人類学等々、全学部の教員の専門領域とも重なり一層幅広くなりました。人間科学部、教育学部の他に、国際学部、情報学部、健康栄養学部教員の投稿も加わり、かつて先生がご指摘された人間の生活を基盤とした学びの領域は一層広がりました。今後はさらに先生がご提唱された水島生活科学、水島人間科学に基づいて、これらを如何に繋げて、人間の生活の学として紡いでいくことが大切であると考えます。

日本の心理学のバイオニアとしてのみならず、心理学で培われた視点から、人間の実際の生活の基盤に立った学問の必要性、学問領域の接点の大切さと真摯に取り組まれた、水島恵一先生の長年のご研究とご指導、文教大学へのご貢献に感謝を捧げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。先生、多くのお教えを有難うございました。

合掌

追記：生活者による科学

研究部の発足にあたって水島先生が生活科学研究に寄せられた論稿のなかで“生活者による科学”について次のように述べておられます。

『人間の生活を全体的にとらえて行こうとする生活学の理念とともに大事なこととして、高度の専門性、アカデミックな能力、研究設備と時間等々に恵まれてなされる学だけが生活学ではなく、そこには「生活者による学」(人間・生活科学)という一面がなければならない。もちろん専門的な高度な研究は不可欠であり、時には大前提である。生活学は単に専門諸科学の生活事象への応用でもなく、また単に生活に関する総合科学でもない。たとえささやかな部分的研究であっても、個々の生活の現実の生活に立脚するものであれば、人間と生活に根ざす基盤を見失わないかぎり、かけがえのない意味を持つであろう。さらにその実践によって創造され、開拓されることこそが望まれる。』と提唱されています。旅立たれた今、反省とともに改めて心に刻む次第です。

生活科学研究所研究員 佐藤ひろみ